

「ウィннаホルンのいま」

楽器とその奏者たち

佐々木直哉 (P0674・神奈川)

はじめに

先号に掲載されました梶原義一さんによる「ウィンナオーボエのいま」に続き、もう1つの“ウィーン式楽器”であるウィннаホルンについて、その現状をまとめることになりました。梶原さんによるウィンナオーボエ編の響みに倣う形で書き進めますが、自身でもこの楽器を演奏するという立場を踏まえつつ「いま」に迫ってみたいと考えております。

ウィннаホルンの歴史

この楽器が「ウィннаホルン (Wiener Horn = ウィーン式ホルン)」と呼ばれる所以は、1830年に楽器職人ウールマンによって、平行ピストン可動方式による“ウィннаバルブ”が発明されたことに端を発します。当時、金管楽器に対して音程可変用のバルブを付けることが急速に広まっていたわけですが、いろいろな仕組みのバルブの1つとしてウィннаバルブも登場し、それが取り付けられたホルンが、結果的に「ウィннаホルン」と呼ばれることになったわけです。他の楽器にも採用されたこのウィннаバルブでしたが、2本のピストンを同時に動かすというメカニク的な面での難点、また、バルブの付いた管を空気が通過する際には、その流れが直角に曲がるので、バルブを押していない時と押した時とで大きく抵抗感が変わるといった演奏上の難点から、次第に姿を消していくこととなりました。代わってホルンの主流となったバルブが、同時期に発明されていた回

転式のロータリーバルブで、現在「ホルン(あるいはフレンチホルン)」と呼ばれている楽器については、このロータリーバルブを搭載したものを指すこととなります。

一方のウィннаホルンは、その音色の維持といった側面が大きかったのでしょうか、結果的にはウィннаバルブ搭載のままでその後の歴史を積み重ね、現在に至っております。つまり、基本的な形状や仕組みは1830年から変わっていない楽器、ということができるわけです。ウールマンに始まったウィннаホルン製作の歴史は、その後ウィーン第一楽器製作者協同組合(ゲノッセンシャフト)デーマル、アンケルと受け継がれて行きました。しかしながら、この“直系”の流れは、アンケルがウィннаホルン製作を止めた1980年頃で途絶えてしまいました。現在ウィннаホルンを製作している、あるいは近年まで製作していたメーカーおよび工房に関しましては、上記“直系工房”の楽器をベースにして、新たに開発・製造を行ったものとなります。

ウィннаホルンの特徴

ウィннаホルンの最大の特徴は「音色」にあります。暖かく柔らかく、ここぞという時には雄々しい咆吼もしてのける。この音色の多彩さこそがウィннаホルン最大の持ち味と言っても良いかと思いますが、その音色は、この楽器特有の構造からもたらされるものでもあります。ここでは、ロータリーバルブ搭載のホルンのことを「フレン

チホルン」と呼称させていただきますが、ウィ
ナホルンとフレンチホルンの相違点は、そのバル
ブ以外にも多々あります。

まず“ボア”と呼ばれる、テーパー（広がり）
が付いていない部分の管体の太さが、フレンチホ
ルンより細いことがその一つ。現在のフレンチホ
ルンのボアは直径が 12mm ほどであるのが一般
的ですが、ウィナホルンの場合は 11mm 前後。
つまり、「細管」の楽器ということになります。

また、ベル（ラッパ）の部分もフレンチホルン
よりも小振りで、さらに、ここに「クランツ」と
呼ばれる“あてがね”が取り付けられており、つ
まり、二重構造となっていることも外観上の大き
な特徴です。クランツについては、小振りなベル
を補い、ウィナホルン独特の豊かな音色を作る
ことに寄与しているものと推察されています。

それから、ウィナホルンはF管（ヘ長調）の
シングルホルンであるということも、大きな特徴
の一つです。フレンチホルンは、F管よりも短い
B管（変口長調）も付いたダブルホルンである
ことが一般的です。中には、管長をさらに短くし
たもう1つのF管（＝ハイF管）をも付けたトリ
プルホルンといったものまで存在します。これら
は、倍音の少ない短い管を付けることで、奏者が
特に高音部を演奏する際の「外し」のリスクを減
らすことができるという効用を持つとともに、音
符によって、音色や音程の特徴を使い分けるとい
ったことも可能にしています。それに対して、ウ
ィナホルンは長いF管のみ。もっとも、これは
正確な表現ではなく、ボーゲンと呼ばれるマウス
ピース（歌口）を取り付ける部分の吹き込み管を
付け替えたり（このボーゲンの存在も、ウィナ
ホルンの大きな特徴の一つですが）それに合わせ
てバルブ毎についている枝管を変えることで、別



ウィナホルン（左：ヤマハ）
フレンチホルン（右：アレキサンダー）



ウィナホルン用マウスピース（右：JK）
フレンチホルン用マウスピース（左：ヤマハ）

の調性に変更することはできません。ただし、フレ
ンチホルンのように、その調性変更をバルブ1つ
で即座に行うことはできません。多くの場合は、
曲の一部でボーゲンだけを付け替え、バルブを押
さずにA管（イ長調）やB管のナチュラルホル
ン的に使う、といった形になります。ということ
で、基本形はあくまでもF管。これは、ウィー
ンの奏者たちが、ウィナホルンのことを「Fホル
ン」と呼ぶことから明らかです。

もう一点、マウスピースについても言及しなけ
ればなりません。ウィナホルンで使用するマウ
スピースは、V字型の深めのカップで、リム（唇
に当たる部分）が薄く、スロート（息が通って
いく穴）の直径が太い、という特徴があります。も
ちろん、この特徴に当てはまらないものを使った

としても、同じホルン用マウスピースですから音は出ます。しかし、フレンチホルンよりも息をたくさん必要とし、また、息を吹き込む（送り届ける）ポイントが、より深い部分にあるウィннаホルンの場合、厚めのリムや浅めのカップといったマウスピースで吹いても、本来の音色を得ることはできませんし、また、楽器のコントロールも却って難しいものとなってしまいます。もっとも、現在のウィннаホルン奏者たちの使用マウスピースを見てみると、必ずしも“ウィннаホルン用”というものを使っているわけではありません。フレンチホルン用として作られていて、ごくごく一般的に店頭で販売されているようなものを使っている奏者もいます。しかしながら、その特徴は、あくまでもウィннаホルン用に近いものであることは間違いありません。

それから、奏法上の観点になりますが、「右手」の使い方についても、ウィннаホルンの場合は独自のものがあります。フレンチホルンの場合、右手は、各指をピタリとつけた上で、あまり丸めずにまっすぐベルの中に入れる、という指導を受けることが一般的です。一方のウィннаホルンでは、親指と人差し指を離し、人差し指以下の4本の指および右手そのものを適度に曲げ、その形状で浅めにベルの中に入れる、という特徴があります。音の反応が遅くなりがちという楽器の特性があるせいかもしれませんが、右手をベルの中に深く入れることでこもった音になることを避け、クリアな発音を心がけているようです。

ウィーンの奏者たち

かつては「ウィーンフィルだけで使用されている楽器」と言われたウィннаホルンですが、実際には、ウィーン交響楽団やフォルクスオーパー管弦



B ポーゲン（左上：アトリエハーロー）
Aポーゲン（左下：ヤマハ）、Fポーゲン（右：ヤマハ）



ストランスキー氏の「右手」

楽団、またトンキュンストラー管弦楽団などにも、使用している奏者は存在していました。ただ、例えばウィーン響の場合、ウィннаホルン使用者とフレンチホルン使用者が半々といった構成が長く続いたため、全員がウィннаホルンということになると、どうしてもウィーンフィルの存在が大きく位置づけられていたわけでありました。

しかしながら、近年はその様子が大きく変わってきています。上記したウィーン響にしても、先般行われた来日公演では、参加メンバー全員（5名）がウィннаホルンを吹いていました。首席の

クシュナーは、これまでフレンチホルンのみを吹いていたはずですが、今回の公演では、担当曲すべてをウィннаホルンで吹き通しましたし、もう1人の首席奏者マクドナルドも数年前からウィннаホルンを常用していますので、ウィーン響の「ウィннаホルン化」は大きく前進していると言えるでしょう。

他にも、フォルクスオパー管がウィннаホルンを使用していますし、非常設団体でも、ウィーン室内管、ウィーン・ヨハン・シュトラウス管、ウィーン・モーツァルト・オーケストラといったところに参加する常連メンバー（フリーランサーなど）は、ウィннаホルンを吹いています。

ウィーンの大メジャーオケで唯一例外なのがウィーン放送響で、ここのホルンパートは全員がフレンチホルンです。放送オケという性格上、機能性や汎用性をより重視しているのかもしれませんが。

さて、このように「ウィннаホルン奏者」の絶対数が増してきた背景ですが、教育面の充実ということと併せて、楽器の安定供給という面が欠かせない要素であると思われます。

1970年代末ごろまでは「新しいウィннаホルン」が供給されることが激減し、また、供給されたとしても、品質面や、その絶対数に限りがあるなどして、広く行き渡らなかつたものと推察されます。しかしながら、1970年代後半にヤマハがウィннаホルンの開発と販売に乗り出し、その後、いくつかのメーカーや工房がウィннаホルン製作に着手したことによって、ようやく楽器の安定供給が実現しました。それによって、この楽器に取り組む若者が増え、そして、ウィーン国立音大のベルガー教授（元ウィーンフィル首席奏者）をはじめとする指導者たちが、その若者たちに的確な教育を施したことで、優れた人材が続々と育っ

ているというのが、現在のウィннаホルン界の状況と言えましょう。

ウィннаホルンの楽器工房・メーカー

現在ウィннаホルンを製作している工房・メーカー、そして、過去に製作しており、現在もその楽器が使用されている工房・メーカーを中心にご紹介いたします。（順不同）

・ ヤマハ

1970年代半ば、「新しいウィннаホルン」の供給が滞ってしまったことで、ウィннаホルン奏者たちは、深刻な楽器難の危機に陥りました。ウィーンフィルのヘグナーは、同僚のトランペット奏者ジンガーがヤマハにウィーンモデルの開発を依頼したことを知り、ならばと、ウィннаホルンの製作も依頼。それによって初代モデル YHR-801 が完成しました。ただし、この楽器は、開発のベースとなった古いウィннаホルンの「コピー」であったため、欠点も多く、「新しい時代のウィннаホルン」には必ずしも相応しくない楽器でもありました。そこで、さらなる開発を続けた結果、新モデル YHR-601 が誕生。これは文字通りの「名器」であり、その品質の高さや、柔軟なコントロール性能などから、現在、数多くの奏者に使われております。現地で販売される楽器については、埼玉県で部品を作り、それをウィーンのアトリエに送って、現地の職人が組み立てる、という方法で製造されています。

<主な使用者（すべて YHR-601）>

ウィーンフィル(国立歌劇場舞台オケ含む): ヤネシッツ父子、アルトマン、イエプストゥル、ヘグナー、リントナー、マイヤー

ウィーン響: クシュナー、マクドナルド、ソングライトナー、アイスナー

フォルクスオパー管：シュテッフェルマイヤー

・ ユングヴィルト

ウィーンから列車で1時間ほどの Freischling 村に工房を構える楽器職人。ナチュラルホルンなどの製作で名を知られていたところに、1990年代前半、ウィーンフィルのトムベック（息子の方）が声をかけ、ウィンナホルン製作に乗り出させました。自身大変優れた製作家でもあるわけですが、トムベックの熱心な監修も相まって、非常に質の高い楽器を安定的に供給。これにより、古い楽器を大事に使い続けていた奏者の中にも、ユングヴィルトに乗り換える人が多く登場しました。最近、新しいモデルが完成し、これもまた大きな評判を呼んでいる模様です。

<主な使用者>

ウィーンフィル(国立歌劇場舞台オケ含む): トムベック、フラダー、プファイファー、ロレンツイ
フォルクスオパー管：クルマー

現在、ウィーンでウィンナホルンを吹いている奏者については、プロ、学生問わず、その大半がヤマハがユングヴィルトを使用しています。

・ エンゲル

ウィーンに工房を構えていた職人でしたが、後継者がおらず、1998年に廃業しました。ウィーンの伝統的な製作手法を継承すると同時に、独自のアイデアも取り入れてのウィンナホルン製作を行い、多くの奏者に愛用されました。ちなみに、“ウィーン金貨ハーモニー”にデザインされているウィンナホルンは、このエンゲルのものがモデルとなっています。

<主な使用者>

ウィーンフィル：ホルヴァート

・ ゲノッセンシャフト

前述「歴史」の中にも登場した、楽器製作者の



ストランスキー氏のウィンナホルン（ゲノッセンシャフト）

協同組合（ウィーン第一楽器製作者協同組合）で製造された楽器。ここで作られた楽器の中から優れたものが宮廷歌劇場（後の国立歌劇場）に納品されたとのことで、ここから巣立ち、後に自身の工房を構えた職人も数多く存在することを併せても、ウィンナホルン製作の歴史上、大きな位置を占める組織体であったと言えます。ここで作られた楽器は比較的多く現存しますが、さすがに寄る年波には勝てず、実用するには至らないものが大半です。そんな中、ウィーンフィルのストランスキーはこの楽器を使用しており、これは例外中の例外と言えるかと思います。100年以上前に作られた楽器ですが、ヤマハのアトリエなどで手を加え、実用に足るレベルでのコンディションを維持しています。

<主な使用者>

ウィーンフィル：ストランスキー

・ ハーグストン

リンツ郊外 stadth Haag に居を構える金管楽器工房。ウィンナホルンの製作に乗り出したのは比較的最近ですが、手頃な価格であることなども手伝って、アマチュア奏者を中心に使用者を増やしています。また、トムベックがアドバイス役となり楽器の改良も進めている模様で、トムベック自身も所有し、何回かの本番で使用しているとのこと。今後要注目の工房と言えるでしょう。

<主な使用者>

ウィーンフィル：トムベック

・ アンケル

ウールマンに始まるウィンナホルン製作の伝統的系譜に位置する工房ですが、残念ながら、1970年代末にはウィンナホルンの製作からは離れてしまいました。現在も工房はウィーン市内に存在しますが、修理等が中心となっている模様です。暖かく包み込むような音色には捨てがたい魅力があり、今でも使い続けている奏者がいます。

<主な使用者>

ウィーン響：エダー、シュラー

・ ガンター

ドイツ・ミュンヘンの金管楽器工房。バイエルン国立歌劇場管のピツカからの依頼を受けて、1980年代初頭からウィンナホルンの製作を行いました。ウィーンフィルでも、セルナー（すでに退職）そしてアルトマンが使っておりましたが、同社がウィンナホルンの製作を取り止めた1990年代初頭に合わせるように、両者ともヤマハに乗り換えました。

・ アトリエ・ハーロー

東京・目白に工房を構える木村晴夫氏製作によるウィンナホルン。リーズナブルな価格で質の良い楽器を入手できるということで、1990年代初頭

には、学生を中心に数多くの奏者がこの楽器を手に入れました。日本でも、廉価モデルであったモデル310を多くの方が買い求めました。ウィーンフィルでは、ストランスキーが一時期愛用し（モデル316）、CD化されたプレヴィン指揮によるR・シュトラウスのホルン協奏曲第1番で見事な演奏を行ったことは、記憶に新しいところです。現在、木村氏は、元ウィーンフィルのジンガーとともにトランペットの開発に取り組んでおり、結果、残念ながらウィンナホルンの製作からは遠のいております。

・ その他の楽器

ウィンナホルン製造のメーカー・工房については以上にとどめておきますが、ウィンナホルンと併せて使われている楽器のことも触れておかなばなりません。

その1つがハイFホルン。管を短くし倍音を少なくすることで、高音のヒット率を上げ、音色面でも輝かしさを生み出すことができるこの楽器は、高音担当ホルン奏者にとって、欠かすことができない「道具」となっています。ウィーンフィルの場合、ヤネシツツ（息子）ストランスキー、イエプストゥル、ヘグナー、フラダー、マイヤーといった面々は、ハイF管のみのシングルホルンをウィンナホルンと持ち替える形で使用しています。これらは、デーマルやチシェクといった往年の名工房が作った楽器であったり、トランペットメーカーとして名高いレヒナーやウェーバーといった工房による新しいものであったりと、奏者によって様々です。一方、トムベックは、ハイF管と通常のF管によるダブルホルンを使用しています（イギリスのパックスマン製）。この場合、ウィンナホルンとの持ち替えはせず、この楽器1本で演奏し通すことが多く、先の国立歌劇場来日公演に

おけるモーツァルトの際もそうでした。シングルホルンにしてもダブルホルンにしても、このハイF管付の楽器は、見た目上はロータリーバルブのフレンチホルンとなっています。もし、彼らがフレンチホルンを吹いているところを見かけたら、それはこれらの楽器であるをご理解ください。

それから、ホルン奏者が担当するもう1つの楽器であるワグナー・チューバ。現在、ウィーンフィルが使用しているのはレヒナー製です。実は、このレヒナーのワグナー・チューバは、日本でもN響が使うなど、多くのオーケストラで愛用されています。しかし、ウィーンフィルのそれは、ベルが小振りの“ウィーンタイプ”で、これまた世界的に使用されているアレキサンダーのワグナー・チューバなどにも見られるような、管体が太く、ベルも大きな楽器とは異なるものとなっています。そもそもゲノッセンシャフトのワグナー・チューバが使われており、レヒナーの“ウィーンフィル仕様”(細管でベルが小振りという、ウィンナホルンと同様の仕様)もそれがベースになっているわけですが、ゲノッセンシャフトの現物は、すみだトリフォニーホールに展示されていますので、実際に目にすることができます。見た目にも大変「美しい」楽器ですので、ぜひともご鑑賞ください。

最後に

ウィンナホルンは、ホルン奏者にとっての永遠の憧れであると同時に、その演奏の困難さから「実用的ではない」との評価を長い間下されてきた楽器でもありました。しかしながら、ヤマハやユングヴィルトといった“良い楽器”が登場したことで、「ホルンという楽器の中の選択肢の一つ」という位置付けとなったことは間違いありません。



ゲノッセンシャフトの“ウィーンタイプ”ワグナー・チューバ

そうした現在、ウィーンの奏者たちにしても、ただ単に「伝統を守る」といった意識からウィンナホルンを吹くのではなく、自身の音楽表現に適した楽器であるからこそ、という積極的な理由で、この楽器に取り組んでいるものと思います。事実、中堅・若手の優れた奏者たちは、この楽器で何でも吹けます。かつては「ウィンナホルンでは演奏不可能」などと言われた曲もありましたが、今の優秀な奏者たちにとって、そういうものは存在しないでしょう。

ウィンナホルンこそが自身の音楽表現を可能にする道具・手段。何でも吹けるのだから、その道具を積極的に選択する。「ウィンナホルンのいま」は、まさにそういう状況にあるものと思います。

“良い楽器”の供給が継続し、新たな指導者の育成も順調に進めば、今後とも「栄華」を誇ってくれることでしょう。また、ぜひともそうあってほしいと願わずにはられません。

参考文献

Thomas Jöbstl. Einfluß des Musikers und des Instrumentes auf den Wiener Hornklang 他